福島建設工業新聞　2014年6月4日（水）

三島町と浜通り被災地で地域建設業の取り組み視察

建設トップランナー倶楽部

清匠庵（上）と富岡駅の視察のもよう

インフラの町医者と複業化をめざす経営者が集まる建設トップランナー倶楽部（米田雅子代表幹事）は30日から3日間にわたり本県の視察研修会を開催し、山間地で地域を支える仕組みづくりに挑む地元建設業の取り組みや、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故で大きな被害を受けた沿岸地域での復旧・復興作業のもようを視察した。

米田代表幹事をはじめ約40人が研修に参加。初日は三島町の佐久間建設工業（佐久間源一郎社長）を訪問した。森林面積が86％を占め、過疎・高齢化に悩む山間地域に拠点を置く同社は、地域維持型JVのモデルとして知られる宮下地区建設業協同組合の中心的存在であるほか、森林資源などの「山の力で地域を支える仕組みづくり」、付加価値の高い「夏秋いちご栽培」、温泉施設「つるの湯」の運営など経営の多角化に挑んでいる。

研修では、会津地方の森林に関わる建設会社や設計事務所、製材所などと連携した「IORI（いおり）倶楽部」の活動を報告。古民家を活用した定住・二地域居住の推進や、板倉工法を採用した木造応急仮設住宅、地域型復興公営住宅などの取り組みを紹介した。

空き家となっていた築150年の古民家をIT企業の開発拠点に作り変えた「清匠庵（せいしょうあん）」も見学。施設は、古民家の風情を残しつつ内・外装を新しい木材に更新。台所やトイレは最新の設備を取り入れた。ビッグデータ解析を専門とする誘致企業「㈱too r」の高杖佳男社長は「来訪したビジネスパートナーの10割が満足して帰る」と説明した。

2日目は浜通りに移動。楢葉町の「道の駅ならは」で、NPO法人ハッピーロードネットの西本由美子理事長から避難生活を送る双葉郡の現状等について講演を聞いたほか、帰還困難区域と居住制限区域の境界にまたがる富岡町、いわき市沿岸部の復旧現場などを視察した。

講演した西本氏は、高速道路の整備促進を求めるために結成した「常磐道を応援する女性の会」の取り組みから、震災以前における同法人の活動の経緯を説明した上で、「地元の高校生とともに考え取り組んできたことが、実現を目前にして震災が発生し、すべて止まってしまった」と述べ、原発事故の影響の大きさを強調。全国からの励ましの声で活動を再開し、「将来の子どもたちのため、原発に負けない、世界一素晴らしい地域にしたい」との思いの一環で進めている〝ふくしま浜街道・桜プロジェクト〟を紹介した。参加者に対しては「治安が悪化している現実もあるが、避難先から戻って頑張っている人もいる。現地を自分の目で見て、肌で感じて、地元に正しい情報を伝えてほしい」と求めた。

富岡町では、帰還困難区域との境界バリケードや商店街、津波被害で壊滅したJR富岡駅を視察。いわき市では、全壊したもののいち早く再建した「道の駅よつくら港」で昼食後、新舞子海岸、豊間中学校、塩屋崎灯台等を視察し、災害公営住宅豊間団地新築工事現場を見学した。山木・加地和特定JVの高崎満宏現場代理人が工事概要を説明し、質疑応答では専門工や資材の調達状況、工期等について質問が出され、PC造の採用や内装のプレハブ化等により、合計192戸が約15カ月工期で完成する見通しであることが説明された。中央台高久地区の応急仮設住宅群、小名浜港も視察した。